

3. 1 1と私たちーそれまでとそれからー私たちの祈り、願い、希望

主催 聖心女子大学キリスト教文化研究所

2011年10月16日(日)10:30~12:30

203教室(1号館2階)

第一部 パネルディスカッション

第二部 参加者全員による分かち合い

コーディネーター：堀江宗正(人間関係専攻 教員)

パネリスト： 福岡 亨子さん 聖心女子学院教諭 (初等教育学専攻 1990年卒)
村田 素子さん 本学職員 (外国語外国文学専攻 1995年卒)
佐藤 紀子さん 本学非常勤講師 (哲学専攻 1999年卒)
山崎 恵さん カリック東京ボランティアセンター (国際交流専攻 2008年卒)
樽井 苑子さん バレエ教師 (人間関係専攻 2009年卒)

過去にならない過去「3. 1 1」

ー「3.11」より過去に戻ることができれば戻りたいけれど、過去に戻ることはいけません。しかし、これを過去にしてしまえばいけない。いなくなった人や今ここにいない人の苦しみを忘れないこと。問い続け、(他者)の声に耳を傾けること。それが祈り。

「被災者の方々が、一刻も早く心の傷が癒され、昔のような生活が送れますように。」(学生10代)

「今まで通り(震災前)になることは無理かもしれないけれど、一刻も早く生活が安定し、社会がよりよくなることを祈ります。」(学生20代)

「大震災に関して、私は一刻も早いご遺体の捜索[発見]を願っています。このようなときに「隣人を愛しなさい」という言葉を忘れずにいたいです。」(学生10代)

ーエピソード(堀江)：ウガンダ人とがれき撤去作業をしたときの話(右写真)。(遺体を大事にする)ムスリムとして被災した行方不明者のご遺体が見つからないことに心を痛めている。遺族にとっては再会するまで終わらない出来事。

「3.11を忘れずに、日々大切に生きよう！」(学生20代)

「3月11日の出来事を忘れず、今のわたしたちができることは何か、常に問い続けることができますように。」(卒業生20代の山崎さん)「祈りと聞くこと」

「この震災による犠牲者に哀悼の意を捧げ、またこの日の出来事を後生に忘れずに伝えていってほしい。」(学生10代)

「あの哀しい日が決して「過去」となりませんように。傷は人に癒してもらえばいい。悲しみは時



に紛らわしてもらっていい。けれど、記憶だけは、何にも消させてはならない、と私は思うのです。」(学生10代)

「時間が経っても忘れてはいけないものが、そこにある。忘れないでほしい。今でも苦しんでいる人がいることを。行動してほしい。みんなが動けば、世界は変わる。」(学生10代)

葛藤—それでも、私たちの「故郷」

—自然は悲惨な苦しみを私たちに担わせました。それをともに担おうとする支援の活動には、無力ではないか、中途半端に終わるためにかえって傷をひろげていないか、自分たちが被災地にいることがかえって被災者の日常を破壊することにつながっているのではないか、義務や仕事のようにないか、専門用語に逃げていないか、などなど様々な葛藤がつきまといまいます。また、そこに住む人たちも、そこを離れるべきか、住むべきか、揺れ動いています。それでも、ここは私たちの「故郷」。被災者にとっても、支援者にとっても。そう思えたとき、あせりや無力感はつながりへ向かいます。

「3月11日以来、「福島」は世界中で知られるようになりました。今後、福島が負の意味で知られるようなことがないように、祈りたいです。(福島出身として祈りたいことです)」(学生20代)

—エピソード(樽井): 福島の現状。中途半端な支援や同情。メディアに言いたいこと。家族のなかの別れ。学校での別れ。残された人の問題。

—エピソード(山崎): ボランティアで福島を訪れたときのこと。「あせらずゆっくり」という言葉。

—エピソード(村田): 阪神淡路大震災での活動で感じた無力さ。あせり。終わらない。長く続ける。無力ではない。救えるのは神様。

—エピソード(佐藤): ボランティアが専門化すること、専門用語やキャッチフレーズに逃げることの危険性。意見を言うことの難しさ。

—エピソード(堀江): 福島カトリック幼稚園のポスターとの出会い。(右写真)

「私たちの暮らす町、懐かしい故郷が無残な姿に変えられてしまいました。復興の中で、これからどんな生き方を求められているのでしょうか。『神よ 変えられないものを受け入れる心の静けさと 変えられるものを変える勇気と その両者を見分ける英知をお与えください』(ニーバーの祈り)」(福島カトリック幼稚園前に貼られていたポスター)

「今も放射能の汚染に苦しみ、故郷を離れて暮らさざるをえない人々へ。彼らの故郷の放射能汚染が少しでも弱まり、またもとの暮らしができますように。また就職難で悩む人々へ。少しでも己れの長所を見出し、生きていく力を得ることができますように。(私も今回就職に向けて動いています。さらに辛い状況下、厳しい条件下で戦う彼らに敬意を表し、私も見倣いたく思います)」(学生20代)



「茨城県の復興についてまったく皆さんに知られていないので、ぜひ知っていただき、復興の手助けをしていただきたいと思います。」(学生10代)

「動物が快適に暮らせる環境をもっと作ってほしい。(動物が大好きで、震災によって飼い主を失った動物たちの餓死していく姿を想像するととても胸が痛いので、人だけでなく、動物にも助けの手をみんながもっとさしのべてほしい。)(学生10代)

圧倒的なものを前にして一弱さを受け入れる強さを

～3.11 以前、私たちは自分たちの力を過信していました。津波は防げるし、原発は安全だと。今、私たちは圧倒的なものを前にして、私たちの弱さに気づいています。そして、その強さにも。

「今回の災害と事故は、わたしたちの自然に対するおごりが引き起こしたものだと思います。「今までの生活に戻る」ことを考えるのではなく、自然を破壊せず共生する社会を改めて目指す時がきているのだと思います。かつての日本人がそうであったように、少ないものでもわたしたちが満足できる社会になりますように。」(卒業生20代の樽井さん)

「人は自然の力の前では、弱くはかない存在です。それでも人は、思いやりや優しさを捨てません。なぜなら、そこには本当の強さがあるから。その強さがある以上、いつかきっと今よりもっと平和な時代が来ると信じています。」(学生20代)

「自然から与えられたものをもっと大切に生きていくことこそが醍醐味だということを再認識してもらいたい。」(学生)

「生きていくことは悲しい。だけど、生きる姿はとても美しい。」(学生10代)

～エピソード(村田)：阪神淡路大震災を経験した友人の言葉「おまけの人生だから」

～エピソード(樽井、福岡)：子どもたちの姿。

「無力」からつながる

～圧倒的な力に孤独に向き合うと、人は必ず「無力」さを感じます。しかし私たちは本当に無力なのでしょう。

～エピソード(村田)：震災後の安否確認メールに癒されたこと。言葉の力。

～エピソード(佐藤)：ボランティアを通して、見知らぬ人とつながること。

～エピソード(福岡)：ボランティアの前後で自分を支えてくれた人たち。

「私が私の人生を生きていることを喜ぶと同時に、他人がその人自身の人生を生きていることを喜びたい。」(本学非常勤講師で卒業生の佐藤さん：震災後、自分の意見も言いにくく、他人の意見を聞くにも不自由さを感じるので、上記のことばを祈りとしてあげました。)

「人と人とのつながりがもっと大切にされますように。当たり前前ですが、3.11によって当たり前でなくなった今、自分たちの生活に感謝できますように。(3.11以前は、自己中心で生きていたのが、3.11が起き、改めて家族のよさ、人とのつながりを確認したからです。電気が計画停電になり、使えなくなると思っていなかったのが、今まで当たり前前だと思っていたことに感謝しなければならぬと思いました。)(学生20代)

「輪をひろげ互いにつながろう 希望に向かって。(初等科の教育目標)」(聖心女学院教諭で本学卒業生の福岡さん)

「崩れるのはみんな一緒に。復興するのもみんな一緒に。(みんながいるという事実が何より日本人の心の支えでは)」(学生10代)

「私たち人間は極めて小さな存在です。この未曾有の震災を前にして私たちはそのことに気づかされます。しかしながら、決して無力な存在ではありません。微力ながらも何かしらの力を持っています。つながること、それが今の私たちにできること。そして、私たちにできる最も大きなこと。」(職員の村田さん：この思いは震災直後から心にとめていたことです。阪神淡路大震災でボランティア活動をしたとき、私は自分の無力さを思い知らされました。その経験は一種のトラウマのようになっています。震災直後、何かしなければと思う一方で当時の体験を思い出しました。無力ではない、という考え方はいつからか持つようになったのですが、今回、自分にあえて言い聞かせています。)

光になれますように

「暗い出来事はあります。苦しいこともあります。しかし、私たちの心は本当に、光を失ってしまったのでしょうか。私たち自身が光となることはできないのでしょうか。」

「世界的に暗いなか、日本が明るくなっていくことで世界の灯となってほしい。」(学生10代)

「あの日以来、世界中から日本へと寄付や祈りが届けられました。今度は私たちが伝える番です。「ありがとう。みんなのおかげで、日本はこんなに頑張ることができます。どうか見守ってください。(3.11に関して、暗いニュースばかり聞こえてきます。心まで暗く、不安で一杯になってしまう人もいます。現実を正確に認識しようとすることは必要です。しかし、ずっとそのまま(それだけ)でよいのでしょうか? 方法や手がかりが見つからなくても、心だけでも明るく、前を向いていたいと思います。そこから何か見えてくるのではないのでしょうか。世界中が日本に思いを寄せてくれました。それに応えなければなりません。今度は私たちの番です。みんなで心をつなげて、「ありがとう」を伝える番です。」(学生20代)

「私たちは多くのものを得すぎたのかもしれません。自らのおこないを見直すきっかけになったのも確かです。でも、これ以上、人々の、私たちの笑顔や希望を奪わないでください。もう充分、身にしみました。共に歩みませんか? (私の家族は、大震災が起こったときも台風がひどい被害をもたらしたことを知ったときも、開口一番出た言葉は、神からの伝言、いや自然からの警告ではないかというものでした。言葉を持たないから、私たち以上に我慢強い存在のはずの彼らの行動には必ず意味があるのではないかということです。神の力を信じる、信じないは関係ないと思います。)」(学生20代)

「30年後の子ども達はきっと辛い体験よりも大切にされた経験が心に残るでしょう。(9/11のミサにおける神父様のお説教)」(聖心女学院教諭で本学卒業生の福岡さん)

私たちの祈り、願い、希望の声

「私たちのいのちを支えてきた大いなるものが、いま私たちのいのちに、災いをもたらしているように見えます。それでも私たちは、その大いなるものに抱かれて、生きてゆくことを願います。心は死ぬこともないし、傷つくこともありません。私たちは、死んだと思われている人たちと、分かたれることなく、ともにいます。私たちは、傷ついたと言われている人たちと、分かたれることなく、ともにいます。あらゆる出来事も、出会った人々も、すべて記憶にとどめられ、決して忘れられることはありません。2011年3月11日。私たちはこの時代に生まれて、いのちのつながりと、心のつながりと、人とのつながりに、以前よりもいっそう気づかされています。そのことに感謝し、ともに支え合い、光となって照らし合い、笑顔を忘れずに生きてゆくことが、私たちの希望を未来につないでいきます。」

(堀江：これまでの言葉を編集するなかで示唆されたものから、コラージュ、再構成を施してみました。)